英雄辨慶傳

全

141

特60
141

辨慶

明治二十年三月十九日内務省受付

鬼谷
勇力
叡山
衆従
刼ス

鬼若丸
池中
鯉魚怪
刺殺
鬼若丸

弁慶幼名を鬼若丸と云
父の弁信名と
師の名慶加阿沙
利の二字を以て名とす
力あくまでつよく武
術を好み自ら
頑髪て
叡山の西
搭ふ在り頃

鯉の怪を退治
叡山出る

諸国を回り木曽の山中あて日とらしき逆あるの人影を便て。

立寄しお賊の住家あて小盗数多車坐おりる焚火して居りて

新慶が鉄棒を振廻して群がる賊を討轉し荒巡るふ式い討踏殺されついあ賊を皆殺し住家あ火をけ焼ちらひて都をさして赴きあれる

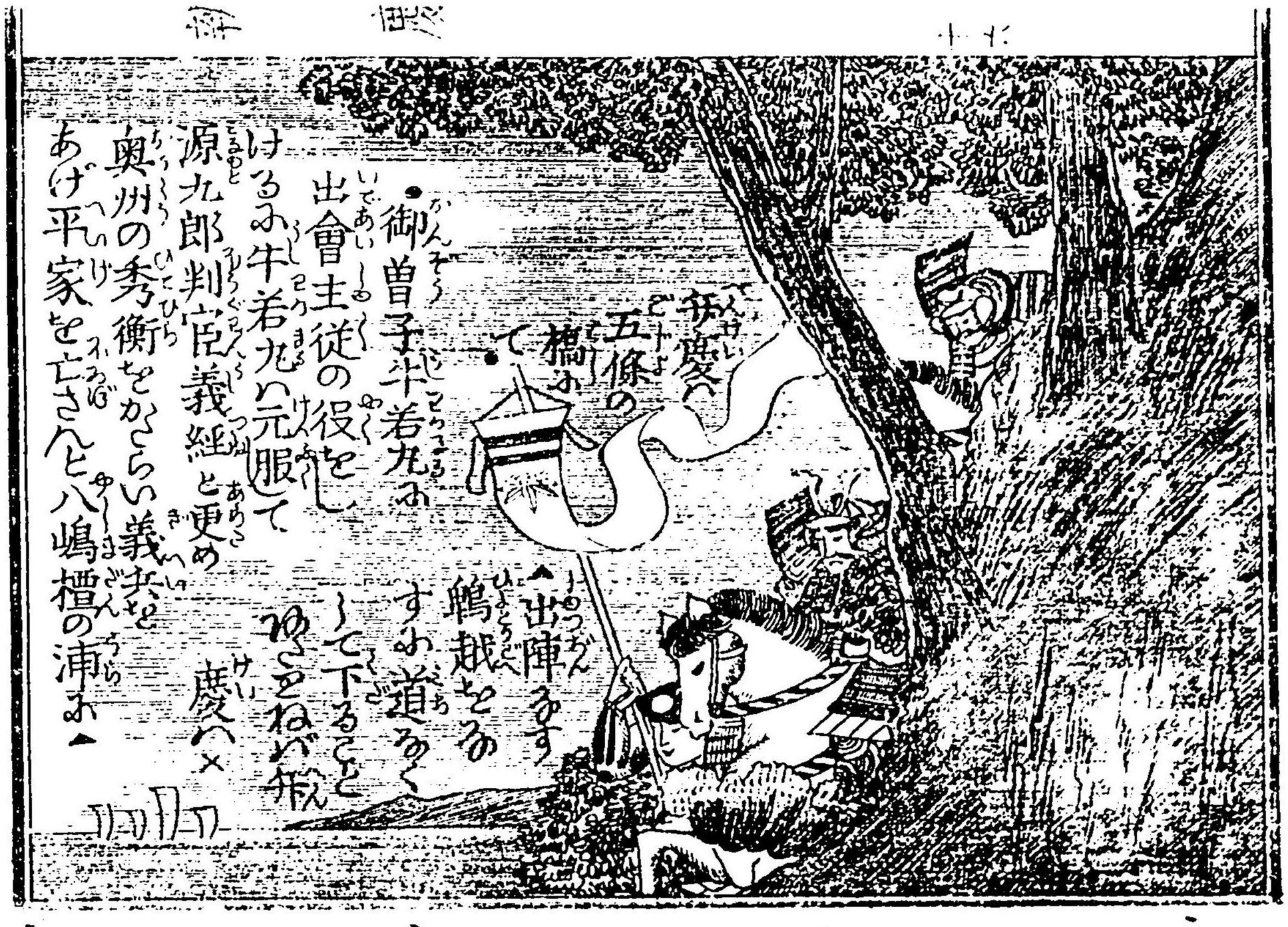
新慶を見て各々立向ふ

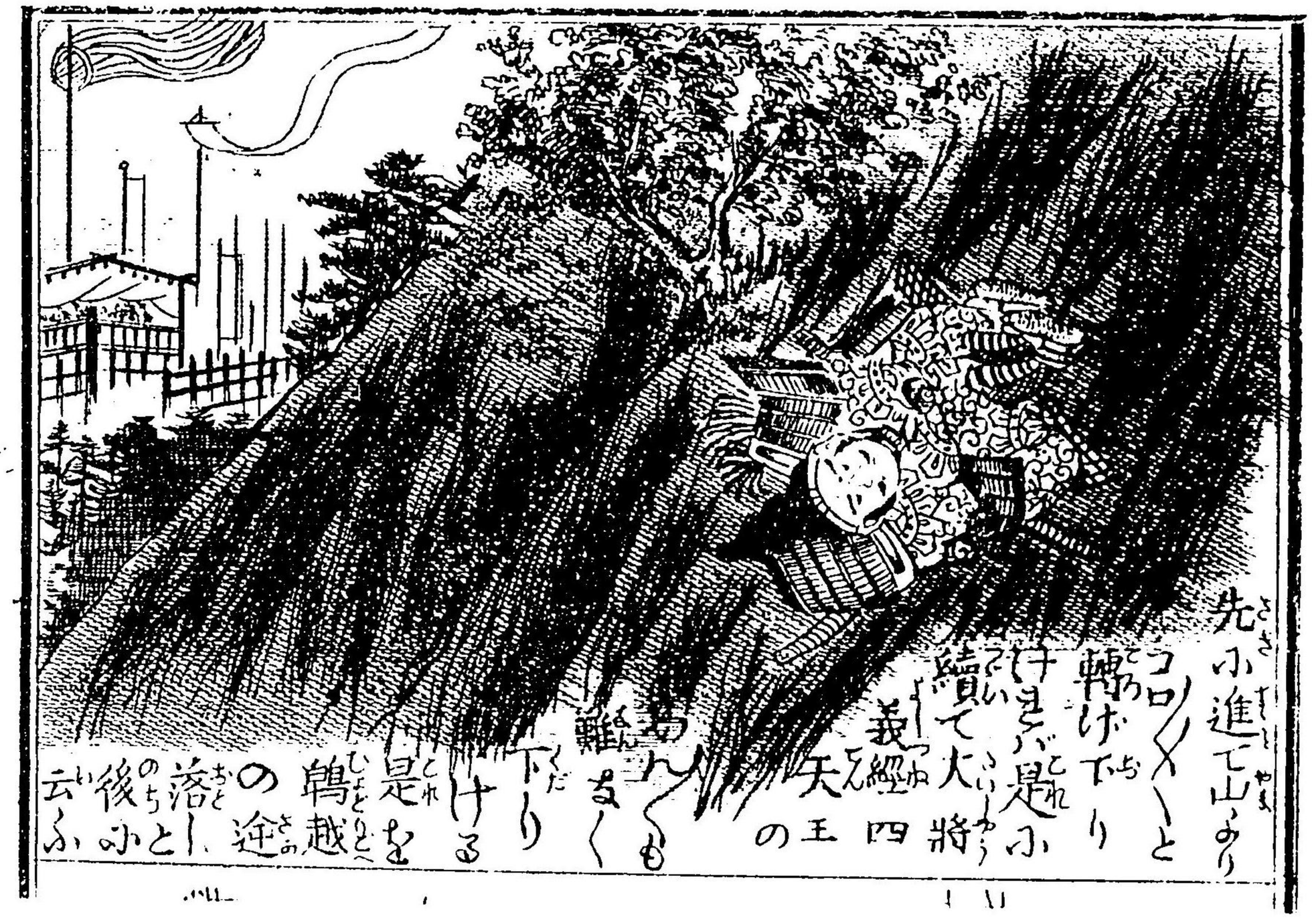
偖も武蔵坊弁慶は
夜毎五條の橋へ出て
九十九人の
夜とる
男
立出る

防ける弁慶
長刀を
終に主従の役をあしらう

偖も武藏坊弁慶
夜毎五條の橋へ出て
九十九人まで花ノ
酒屋の夜とゐ
男て立出る
弁慶が在先を

坊なるか弁慶
長刀を以て切り
何辺へ逃る
其早きを
追の弁慶
を終て主徒の役をあしろ


●御曹子牛若九郎
出會主従の役をしるゐ牛若九郎元服して
源九郎判官義經と更め
奥州の秀衡をかたらい義兵をあげ平家を亡さんと八嶋檀の浦ゑ
●五條の橋ゑ
慶ゑ〆
▲出陣ゑす鵯越をゑすゑ道ゑく
して下ることゆゝしねば叓


先小進て山より
コロ〳〵と轉げ下り
けるが是ゑ
續て大將
義經四天の王
難なく
下りける
是を
鵯越の
逆落し
後ゑふと云ふ

偖も源の義経を平家を亡さんと八嶋檀の浦ゐ戰ひ發りしゐ能登守教経い義経を討取んと男をふるつて立向ふは武さゐう矢慶ハ
睦つゐ追ふめ船ゐ飛のり千変万化の

日頃の力量十倍し大長刀を打ふり平家の大軍り中へ無二无三ゐ切て入り當るを幸薙倒し伐り立て荒廻り敵する者の働ゐも無りしとそ

平家の一門西海ふ沈こ皆悉討死し亡びたまへば尚平家の残黨を平げんと源氏の武運長久を祈の為摂州の梅花今を盛りと咲たまへば大將義経の命を受て年慶ハ華太ふ

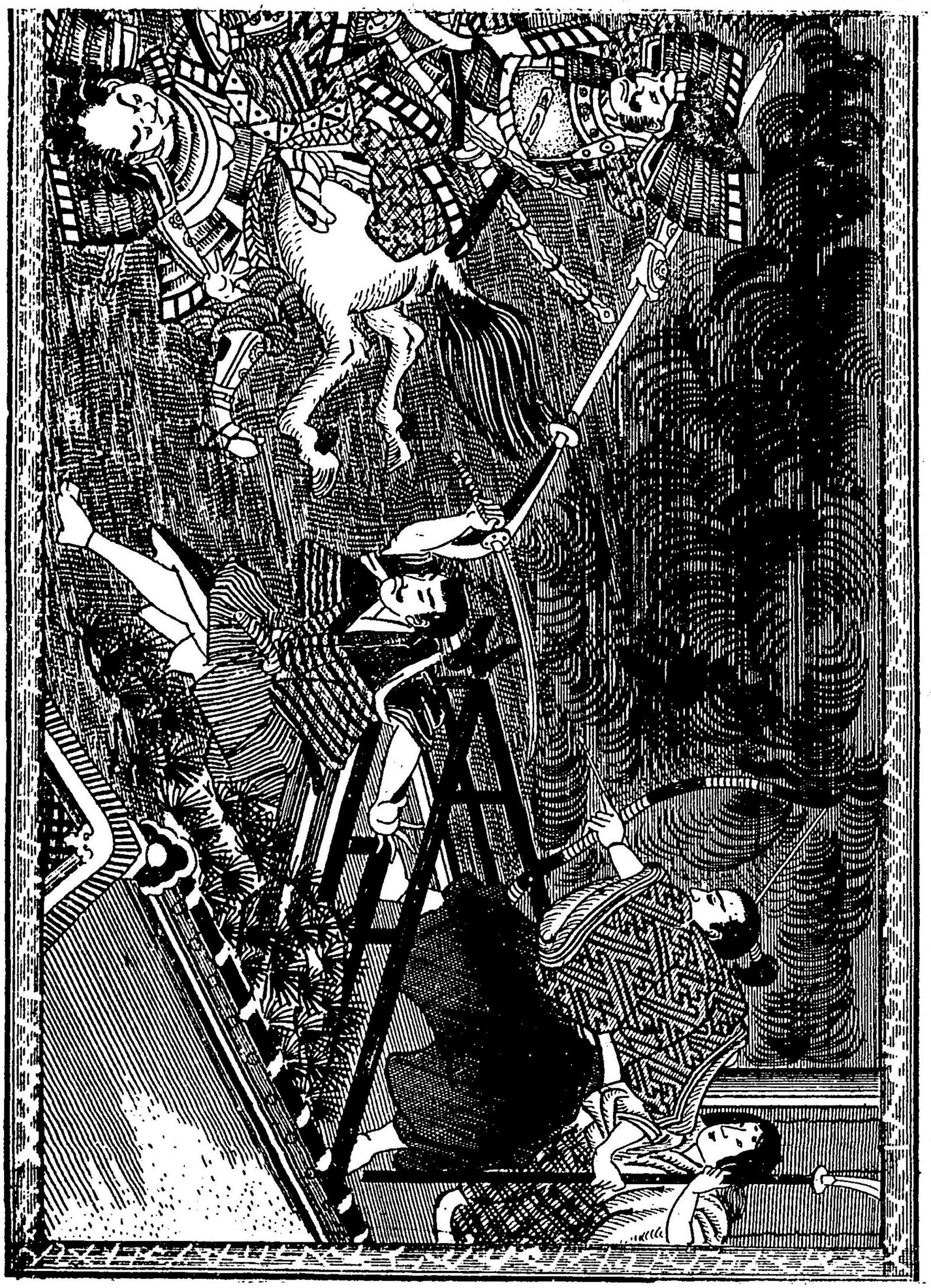
明治十九年十二月十九日御届 同二十年一月廿日出版 編輯兼人 浮久次郎 東京浅草亀井町十番地

梅宮ふ詣るを折しも一月の初なれば世に希なる此花を認て其文ふ此花東南在て一枝切て一枝助メ

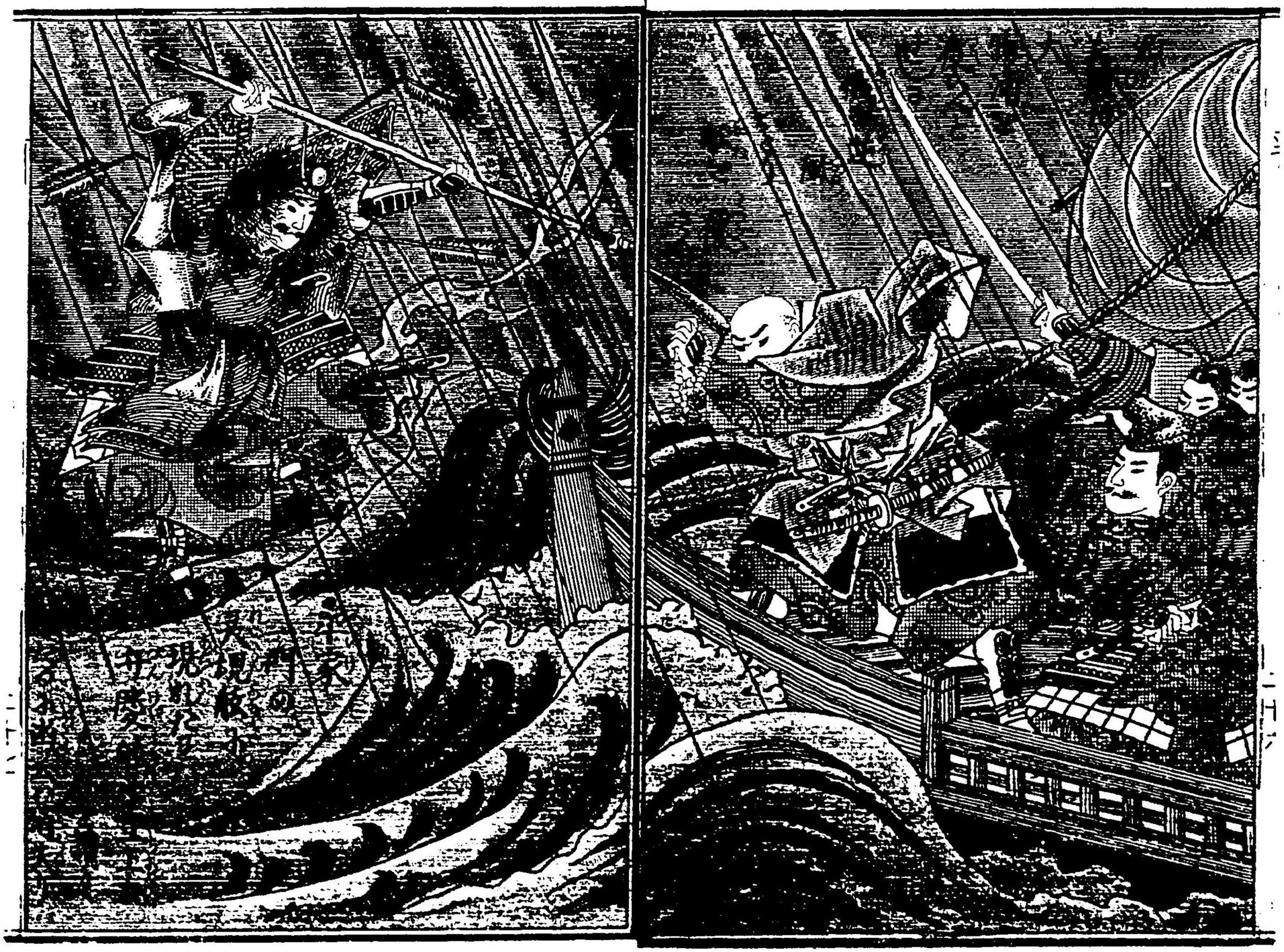
此花東南在一枝切一枝助

平家の一門西海ふ沈こと皆悉討死し
亡びたまへば尚平家の残黨を平げんと
源氏の武運長久を祈の為摂州の
梅花今を盛りと咲なまじ
大将義経の命を受け
毎度ハ筆太ふ

梅宮ふ詣るそノ折〳〵も
二月の初ゑれば
制札を
認める文ふ
此花東南在一枝切助
東南在一枝切助
此花東南在一枝切助
書べしと



堀川武藏
舘坊鎌倉
勢戰



源の義經大物浦を渡らんとせし
俄に逆風
船を覆えす
平家一門の
靈魂船に
現れたまい
弁慶船に
立上り
經を讀み
なるに幽霊い消失り

茲ハ義經ハ
梶原景時ガ
讒言ヲテ兄
頼朝ト御中
不和トヨリ
鎌倉ノ討手
ヲ引受戦ヒ〳〵ガ
腰越ノ舘ヲ立退ヒテ
吉野ノ河連ガ舘ヲ
在セ〳〵ガ山門ノ
衆徒義經ヲ
討取らんとす

弁慶ハ
山門ノ
荒法師等ヲ
討轉シ〳〵
四天王ト共ニ
義經ヨツキ
あさがひ
落延る所ヘ
佐藤忠信走せ
來りて義經ノ
身代りとなりて
横川覚範ト討
義經主従ヲ落せり

義經
山伏
奥州を
行先
新関を構へて
虎口
勧進帳
弁慶

判官殿と
新関
関守富樫
左衛門
通さぬ

偖も義經主従ハ山伏よ姿もとう(僅)七人にて奥州を志して落ゆきぬふよ
行先〳〵よ新関を構へて
弁慶俵て勧進帳を讀て虎ゝ退れを
難なく関を通り
弁慶がさいちの

判官殿を捕んとす既よ安宅の新関はかりよ関守富樫左エ門あゆ〳〵通さぬぞ
勝れ〳〵

義経主従は
弁慶が才智
よって難る
奥州
泉秀衡の
館に着たるに
秀衡と対面し
互ひの無事を
悦び盃を酌ませ
たるに此時弁慶は
居を構へさせらる

盃引受息つぐ
呑すさり
秀衡の息
泉三郎忠衡伊達治郎
錦戸太郎其他のめん〳〵も
義経主従を慰める
主従も今ぞ
此事早くも鎌倉
聞へ頼朝の
厳命にて
討手の
奥州さして
走向ふと聞て
ちの〳〵軍の用意
を為て待ぞ

義経主従ハ
弁慶が才智
よりて難を
奥州
泉秀衡の
館ニ着たるニ
秀衡と對面
互ひの無るを
悦び盃を取かわし
たるニ此時弁慶ハ
暮の
身をれば
方ると秀衡ニ
仕さるニ高館の城ニ
居を構へさせらるゝ

盃
引
受息
つゞずみ
呑干さり
秀衡の息
泉三郎忠
衡伊達治郎
錦戸太郎基
他のめん〳〵
義経主従を
慰めるゑ義経
主従も今ハ
此事早くも鎌倉
聞へ〳〵ば頼朝の
嚴命ゐて
討手の
奥州さして
走向ふと聞て
ちの〳〵軍の用意
を色て待うけり

藁人形を造り大手の橋の上ふたらせ城ふ火をうけ義經と共り落のび蝦夷地さして赴たるふ敵勢い斯とも知らず押寄せ來りしふ城中より火と燃上り落城す

伊川の立往生といへり

義經主從ら高館の城に籠り竜ヶ谷倉の計ひを引受

合戰ハ及ビ難ク敵ハ紅をそめ[illegible]ハ[illegible]たるを見れば皆退行るぞ年慶ハ

謀をめぐらし藁人形を造り大手の橋の上ハたゝせ城ハ火をかけ義經と共ハ落のび蝦夷地さして赴たふ敵勢ハ斯ハ知らず押寄せ來りしハ城中ハ燃上り落城ス哀

衣川の立往生といふ

武蔵坊弁慶ハ衣川
ニて討死せし体ゐにして
鎌倉勢を欺きあゐせ
義経とともゐ蝦夷
地ゐ下り蝦夷人と
戰爭ゐ及びしが
弁慶ハ鉄の
棒を打ふり
て
群がる敵の中へ
打て出あるさいそひ抱軍ト
打すゑ
荒廻れハ
蝦夷兵ハ
度を失ひ

さんぐ
敗爭
日なり
根行

武蔵坊弁慶は衣川
にて討死せし体なりとて
鎌倉勢を欺きおふせ
義経とともに蝦夷
地へ下り蝦夷人と
戰爭に及びしが
矢尻は鉄の
棒をかふり
て
群がる敵の
中へ
打て出あるいは
さいをひ抱轉し
打すて
荒廻れ
蝦夷兵
度々
三十六

さんざん
敗爭
皆
退行
三十七

蝦夷の国王ハ義経の才智無比廣の強勇ふ恐れ終ふ降参し
義経を用ひ
たるゆへ
義経ら
専仁愛を
つくして
民を恵む
弁慶も
義を重ん
ず

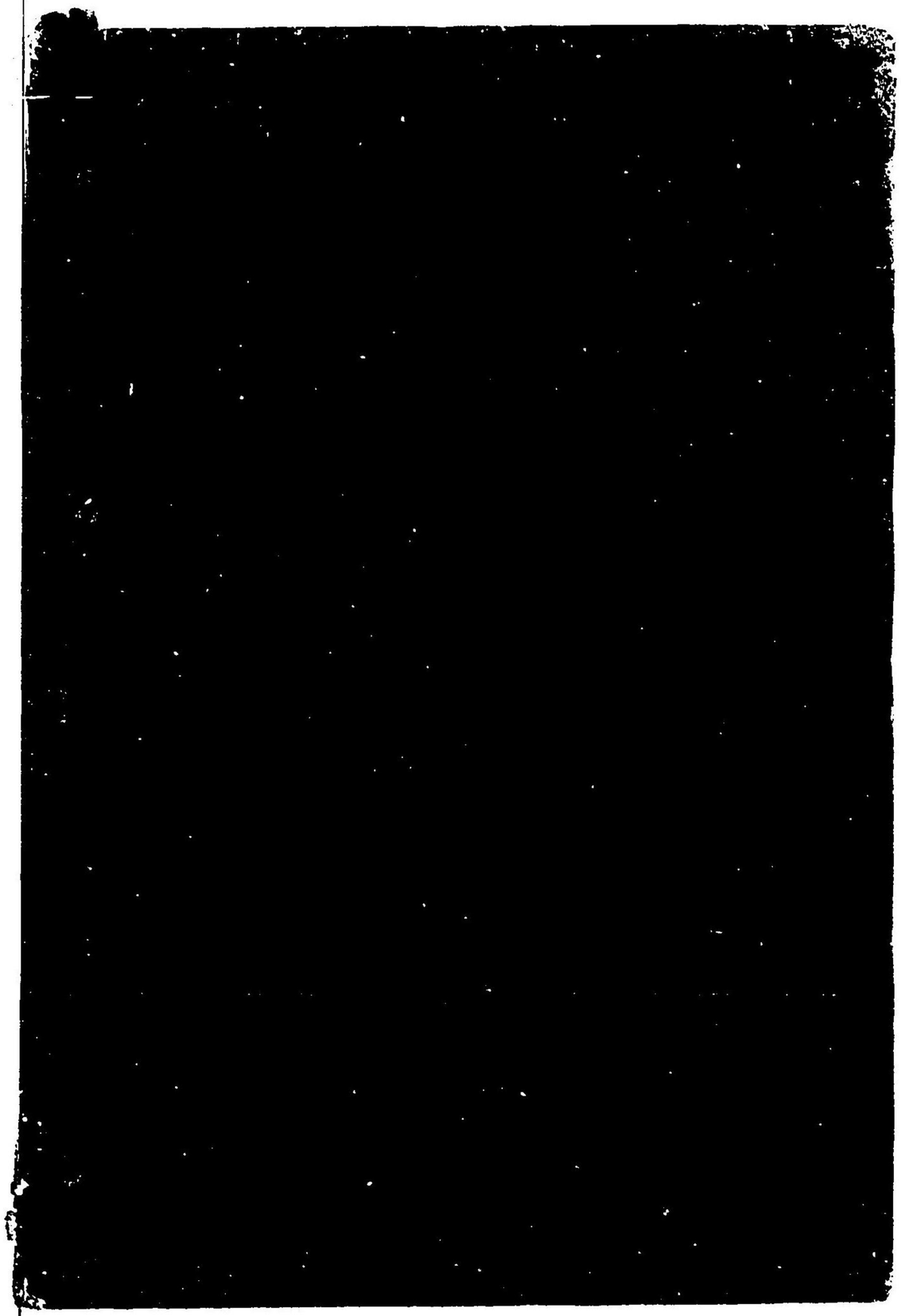
君を敬ふ
蝦夷の
人民
皆
仁徳を
慕ひ
一国下
安穏な
けとゞ義経
終りて後ち
一社の神ふ
祭り義経
大神と崇
今も蝦夷を
地ふ存せ
り

蝦夷の国王ハ義経の子
智恵慶の強き男ゆゑ
終ふ降参ーに
義経を国王
たるべく
義経ハ
専仁愛
つくーて
武を
仁慶
義を重ん

君を敬まふ
蝦夷の
人民
皆〻
仁徳を
慕ひ
田下
安穏な
けるバ義経
終りて後ち
一社の神ゆ
祭り義経
大神と宗
今も蝦夷
地ゆ存せ
り

武蔵坊弁慶ハ
智勇衆ニ勝れ
大日本ハいふも
更なり蝦夷地
までも英名を
終を全ふし
奥州白川の
駅ニ一社の
神ニ祭られ
武蔵明神
崇め尊
敬せらるゝ
ぞと〳〵

同二十年　月　日出版
日本橋區亀井町廿五番地
編輯兼出版人　澤井久次郎



特60
141

091941−000−1

特60−141

英雄弁慶伝

沢　久次郎／刊

M20
DBP−0057